



BSR 通信

BSR 推進室ニュースレター第 15 号

平成 27 年 6 月 10 日

発行：大正大学 BSR 推進室

〒170-8470 東京都豊島区西巣鴨 3-20-1

03-5394-3079 (直通)

bsr_lab@mail.tais.ac.jp

「さざえ堂」へ通う授業

大正大学人間学部臨床心理学科

専任講師 川俣智路

目次

- 1 頁：巻頭言
- 2 頁：研究ノートⅠ
- 3 頁：研究ノートⅡ
- 4 頁：さざえ堂だより・今後の予定

「さざえ堂へ行き、フィールドワークをし
てきなさい。」

これは臨床心理学科のある授業で、
私が学生に課した課題です。臨床心
理学科では外部機関での実習を実
施することを勧めており、フィール
ドワークは外部での活動に必要な力
を養うためにはとても良いトレー
ニングとなります。そこで「さざ
え堂を有効活用するためには何が
必要か？」というテーマで、フィー
ルドワーク実習を実施したのです
。

当時はまださざえ堂が建立されて
から日が浅かったこともあり、この
授業を通じて初めてさざえ堂に足
を運んだという学生も少なくあり
ませんでした。学生は何度かさざ
え堂に足を運び、来

観者と会話を交わし、商店街の人
々の話に耳を傾けました。多くの
学生は、さざえ堂への来観者が予
想よりも多いことに驚いていまし
た。

その後、調査結果を報告し意見
交換している際に、複数の学生が
「有効に活用」とはどういうこと
か、という点に疑問を持ちました
。議論の中である学生が次のよう
な意見を述べています。

「さざえ堂の有効活用にとって、
今最も必要であることは『人々の
ニーズとさざえ堂の意義を結び
つけるもの』の探求』であると思
う。そのためには、最初に、さざ
え堂を知る人の生活におけるニ
ーズを調査する必要がある。そ
うしたニーズに対して、さざえ
堂が設立

された文脈・さざえ堂の意義（宗
教を重んじることなど）が貢献で
きる点を見つけることが必要では
ないだろうか。」

臨床心理学においても、セラピ
ストに何ができるかということは
、来談者がセラピストに何を求
めているかを知ることから始ま
ります。学生はさざえ堂フィール
ドワークを通じて、地域の方々
を知る重要性を知り、そこから
さざえ堂がそこにある意味につ
いて考えることができたようで
した。

また機会があれば「さざえ堂に
通う」授業をしてみたいと考
えています。今度はさざえ堂の
階段を上って下りてく間に、
学生はどのようなことを学んで
くれるのでしょうか。

研究ノート I

自死に向きあう

—自死者追悼法要について③—

前回から時間が空いてしまいましたが、今号は10号にひきつづき、自死遺族の現状について論じてみます。

第 10 号の研究ノートでは、自死遺族に生じる 10 の反応として、「身体的な症状」、「さまざまな形の『なぜ』」、「自責感・無力感・自信喪失」、「不安・恐怖感」、「怒り・イライラ」、「自死した人のことばかり考える」、「抑うつ」、「回避・隠蔽」、「安堵感・救済感」、「命日（記念日）反応」を紹介しました。（高橋祥友・福岡詳編『自殺のポストベンション』より）本論では、まず自死遺族につよくあらわれると思われる「さまざまな形の『なぜ』」、「自責感」の 2 つの感情を詳しく述べてみます。

さまざまな形の「なぜ」

自死を引き起こす要因は平均して4つあるといわれています。たとえば、労働者であれば、事業不振、職場環境の変化、職場の人間関係の悪化、過労、夫婦間の不和、負債、心身の不調といった要因があげられ、それら複数の要因が絡み合い、自死に至るというものです。（『自殺実態白書 2013』

(2013 年 3 月、NPO 法人ライフリンク発行)

したがって、明確な理由というものが
見つけにくく、「なぜ死んでしまったのか」、
という疑問が解消されることなく、わき起
こり続けることになります。

さらに、「なぜ家族のことを考えてくれなかったのか」、「どうして誰も気づいてくれなかったの」、「どうして何もしてあげら

れなかったのか」など次から次へと「なぜ」が生じてきてしまいます。

しかし、もはや聞く手立てはありません。終わりのない「なぜ」になり、遺族は、どうしても自死を納得できない精神状態に延々と居続けなければならないのです。

消えない「自責の念」

上述のように明確な原因がわからな
いなかで、遺族の心は、「自分が死に
おいてしまったのではないか」、「あの
とき、何かできたはずだ」、「無理をして
でも会社を休ませていれば」と自分を責
めるようになっていきます。

「何もしてあげられなかった」、「一緒にいたのに、何も気づかなかった」という無力感も生じますし、「こんな罪深い私は幸せになってはいけない」、「笑っている自分に気づくと自分が許せなくなる」と自分を罰する考え方を持つ遺族もあります。

皮肉なことに、政府などがおこなう自死予防キャンペーンが遺族の自責感を増幅させることもあります。「自殺は防ぐことができます」、「自殺したい人はサインを出しているので、サインに気づきましょう」という呼びかけやスローガンが、遺族に「私は防げる自死を防げなかった、サインに気づけなかったのだ」と思わせてしまうのです。



自死者が苦しむという俗信

心理的反応とは別の面でも、自死遺族が苦しむことがあります。仏教と関わりがある問題としては、自死者のゆくえんがあげられるでしょう。

「自死した人は命を粗末にしたので、成仏ができずに、地獄で苦しむ」、「いつまでもさまよう霊となって、浮かばれない」という話を耳にしたことがある人は少なくないでしょう。当事者となるまでは、気にもしていなかった、いわゆる俗信めいた説が、当事者（遺族）となった途端に大きな苦しみとなってしまいます。

遺族にとって、死を選ばざるをえないほど苦しい思いをした家族が、死後も苦しんでいるというのは受け入れがたいものです。なぜ、今も苦しまなければいけないのかと嘆く多くの遺族がいます。

しかし、自死者の多くは、深い悩み、苦しみの末に、「もう生きていけない」、「消えてしまいたい」となり自死という選択をとるといわれています。そこには、「生きられるなら、生きていたいけれど」という思いが含まれていて、「命を粗末にしているわけではない」と自死念慮者の相談を受ける人は口々にいいます。

そうした当事者の実情に目を向けず
に、葬儀の現場においても、悲しみにく
れる遺族、そして自死者を貶めるような
発言をする僧侶が今もいるという話もあ
ります。

また、研究ノートⅡで報告をしているように、自死を異常な死、けがれた死とする社会の偏見に苦しむ遺族も少なくありません。

こうした現状が、あらゆる人は等しく仏さまに救われるという趣旨のもと、同じ経験をした人だけが集まる安心した空間・時間である自死者追悼法要を生んだともいえるでしょう。(〇)

研究ノートⅡ

シンポジウム参加報告

5 月に開催されました 2 つのシンポジウムについて報告をいたします。

自死への差別・偏見

5 月 18 日、衆議院第一議員会館 1 階・多目的ホールにおいて、「第 4 回自死遺族等の権利保護シンポジウム～改めて自死への差別・偏見を考える」が開催されました。（主催：自死遺族等の権利保護研究会、共催：全国自死遺族連絡会）

いまだ社会のなかに存在する自死への差別や偏見について、精神医療・当事者遺族・法律のそれぞれの面から見つめ直そうという趣旨でおこなわれた本シンポジウムでは、精神科医でノンフィクション作家でもある野田正彰氏が基調講演をおこない、次に娘を自死で亡くした母親による、当事者として直面した偏見・差別の体験談。そして、法律の専門家として弁護士 3 名と司法書士 1 名が登壇して、いじめ、死亡保険未払い、過労自死、賃貸物件の賠償請求といった具体的事例をあげて、現在も根深くのこの社会の差別・偏見を指摘しました。



賃貸物件で自死が起きた場合、その物件は心理的瑕疵物件とされ、次の借主に対して告知義務が生じたり、

賃貸料を大幅に下げざるをえないということがおこります。そのため、大家や不動産業者から遺族にたいして、損害賠償請求が起きるのですが、弱り切っている遺族に過大な金額の請求を行ったり、近隣住民への慰謝料、お祓い費用を請求する事例が多々あるということです。

弁護士は、この問題は「自死＝異常な死」という偏見に基づくものであると指摘、野田氏も、自死者が成仏しないといった俗信からきているものであるから、仏教界はその払拭をすべく声を上げるべきであると厳しい口調で発言しました。会場には、僧侶の姿もちらほら見られましたが、まだまだ仏教界全体としては、この問題に対する関心は薄いと言わざるをえません。今後、仏教界が自死とどう向き合うのか、社会が注視していることは留意したいところです。(O)

「本物」の社会貢献とは？

大阪・應典院（浄土宗・秋田光彦住職）では「ビヨンドサイレンス～ポストオウムの 20 年を語る」と題し、さまざまなゲストを招き、ここ 20 年の日本宗教をめぐるトピックについて公開講座が開かれています。

5 月 27 日、第 2 回目となる講座が開かれ、稲場圭信氏（大阪大学・准教授）をゲストに、「宗教の社会貢献は、本物か」というテーマで白熱した議論が交わされました。

講座は、稲場氏による「宗教の社会貢献」をめぐるこれまでの宗教界、学界の動向のレビューからはじまりました。

稲場氏によれば、1995 年におこった阪神淡路大震災以降、宗教者や宗教団体の公的領域での活動が顕在化し、研究者もそこに注目するように

なったといいます。その結果として立ち上がったのが「宗教の社会貢献研究プロジェクト」であり、この研究成果は、書籍『社会貢献する宗教』、叢書『宗教とソーシャルキャピタル』（全 4 巻）などにまとめられました。

また、2011 年の東日本大震災においては、個人レベルから教団レベルまで、さまざまな宗教アクターが復興支援に携わっていることや、震災後、7 割近くの学生が災害時に宗教や宗教者の役割があると答えるなど（第 11 回学生宗教意識調査報告 2013）、宗教者へのニーズの高まりが社会側におこりつつあるといいます。

しかしながら、社会貢献活動と布教との境界があいまいになるばあいや教団を超えた連携が構築されづらいといった点も課題として指摘されました。

講座後半のフロアを交えた質疑応答では、「本物」の社会貢献について議論が交わされました。檀信徒ではなく社会一般へむけた活動が社会貢献であるという意見がある一方、月参りや法要などの宗教活動も社会貢献的な「寄り添い」といえるのではないだろうかという現場からの意見もありました。

また、活動している宗教者自身は、ことさら「社会貢献」と思っていないのではないかという指摘もありました。しかし、説明責任が問われる時代において、他者に説明する言葉として「社会貢献」という語をもちいる妥当性もあるだろうという意見もありました。

このように、宗教の社会貢献をめぐる議論は、現場と理論の場を往復しながら豊かに展開しています。BSR 推進室では、実践だけでなく議論にも注目し、SR（社会的責任）概念の構築につとめていきたいと思っています。(T)

さざえ堂だより

—すがも鴨台花まつりレポート—

去る 5 月 16 日に「第二回すがも鴨台花まつり」と題して、月遅れでお釈迦様の降誕をお祝いしました。昨年に引き続き「トゲ」を抜いた「ばら」で飾られたさざえ堂鴨台観音様のご宝前で、勝崎裕彦学長を導師として本学関連の五宗派の学生・職員の僧侶により「すがも鴨台花まつり法要」を厳修しました。

また今年は、地域構想研究所で進めている広域地域連携「北日本 天の河コンソーシアム」「北海道 くろしおコンソーシアム」の自治体のご協力により、「ふるさと祭り」と称してご当地グルメ屋台や地方物産市場が開かれ、ご当地キャラも来場し会場を盛り上げました。

その他にも、ダブルダッチ（縄跳び）・大道芸・坐禅の「こども体験イベント」、お坊さんカフェ「僧話花（そわか）」、エスパス空でのギャラリートーク、ご当地キャラソング界の帝王といわれている石田洋介さんのミニライブ「歌う



巢鴨御殿!! 番外編 in 鴨台花まつり」など様々な催しが目白押しでした。

生憎、当日は朝のうちは小雨まじりの天気でしたが、メイン会場である大正大学巢鴨キャンパスだけで、およそ三千人の方にご来場いただきました。

このすがも鴨台花まつりを通じて、ここ巢鴨地域の魅力を再発見し、また各地方自治体の魅力を広く知ってもらい、そして互いの交流の中から新しいものを創生する、そして東北の被災地復興の一助となりました。併せて身近に仏教を感じていただくイベントとなったと思います。(M)

今後の予定

6 月 20 日 (土)	11 時～12 時	花会式 (真言宗豊山派)	鴨台観音堂前
	9 時～13 時	あさ市	南門 けやき広場
	13 時～15 時	お坊さんカフェ僧話花	5 号館 1 階
7 月 3・4 日 (金・土)	16 時～	鴨台七夕盆踊り	3 号館前広場
7 月 18 日 (土)	11 時～12 時	花会式 (真言宗智山派)	鴨台観音堂前
	9 時～13 時	あさ市	南門 けやき広場
	13 時～15 時	お坊さんカフェ僧話花	5 号館 1 階

